

変成の最初の「動因」を示すものであった。

本文の前半は、フラメルが書物を入手してから、二一年後にユダヤ人学者に邂逅してこの図の謎解きを得、「金属純化」に成功するまでの経緯を記しており、後半は図の中央部・下部のヘルメス学的な読み方の解説にあてられている。興味深いのは、フラメルが「図を見る者の能力と知識に従って、二つの事柄を表現」することを考えていることである。その第一は「最後の審判とイエスの再臨の日に行なわれる」「来たるべき不可避の復活の秘儀」であり、第二は「自然哲学に通じたひとびと」への、錬金術の「実験操作一切」の教示であった。

こうした表現のアンビギュイティは錬金術につきもので、フラメルも折にふれ二重の意味を語っている。しかし、どちらかといえば、フラメルは、錬金術特有の、一つのことばが多くを意味し、多くのことばが一つを意味する語法を利用した、語りながら匿すという韜晦的な伝統からはまぬがれているようである。『望みの望み』では、フラメルは、「一つの方途」「一つの作業法」

「ただ一連の色彩の出現」そして「真の名前はただ一つである」ことを強調している。本書が全くの門外漢であるわれわれにも比較的読み易いのはそのためであろう。

中央部・下部の図は、番号をおって読むならば、最初に用いられる「容器」と「原質」、そして腐敗が始まって熟成にいたるまでの、レトルト中での金属の変成過程を示す一種の地図となっている。とりわけ、克明に記される図の細部の彩色は、実際のレトルト中での、あるいは象徴的な色彩の変化と対応している。一般に錬金術では、「黒」「白」「赤」が、過程を示すものとしてシンボリックに用いられるが、フラメルははるかに念入りに色彩の変化を語る。たとえば最終段階を示す第八の寓意図(翼をもつ獅子とその足をつかむ男が描かれている)に彼は、暗紫色、緋色、赤橙色、真紅などの色を点している。

とまれ、われわれが西洋のこうした秘教的な思考と表現にどうしようもなく無知であり、全く不慣れであることを知るためにも本書は読まれる価値を有しているだ

ろう。巻末の訳者解説は、四つのタイプのフラメル伝説を検討しておりたいへんに示唆的である。

(四六判 二五六頁 一九七七年七月 白水社
「ヘルメス叢書」1 二〇〇〇円)
(川島昭夫 京都大学大学院生)

会 告

昭和五十二年度史学研究会大会および総会は、予学通り十一月二日(水)午後一時より京都大学楽友会館で開催されました。公開講演は狩野久、佐藤長両氏により、つぎの演題で行われ、盛会裡に終了しました。

木簡研究の諸問題 狩野 久氏
古代チベットの軍制について 佐藤 長氏

なお、大会、総会に先立って開催された秋季定例理事会・評議員会において、役員交代の件が議せられ、川勝義雄氏が監事に、網野善彦・井上秀雄・柴田三千雄各氏が評議員に、それぞれ選任されました。 史学研究会